

Steve Maguire and Cynthia Hardy, 2009, "Discourse and Deinstitutionalization: The Decline of DDT," *Academy of Management Journal*, Vol. 52, No. 1, pp. 148–178.

1 概要

- 言説が制度領域においてどのように急激な変化をもたらすかを言説制度論の枠組みで分析
- 制度領域外部のアクターによる非制度化
- DDT 利用の衰退を事例に

2 はじめに

- 外部アクターによる非制度化のために用いられる理論的枠組
 1. メタファー(隠喩、象徴)の解釈(translation)
 2. 組織的言説理論
- 蓄積されていく個々人の解釈がどのように言説を変化させ、フィールド内の権力や知識を再編するか

3 制度と非制度化

制度 所与としての地位を獲得し、将来の主体間の相互作用を形作ることによって行動を条件付ける過去の実践と理解の歴史的産物。

- 制度化を支える3つの柱
 - 規制 *Regulative*. 主体の行動を制限する権威あるいは権限
 - 規範 *Normative*. 「何が正しいか」の定義に影響
 - 認知 *Cognitive*. 社会のリアリティーを構成する共有された理解
- 制度の安定と再生産にも影響
- しかし、これらの柱の崩壊や再編によって制度が変化

3.1 外部からの非制度化

非制度化 既存の制度化された営み (practice) が排除されること。より良い選択肢によって替わることは非制度化を意味しない。

- エリート空間外に存在し、中心性、コミュニケーションのネットワーク、正当性を欠如した外部アクター
- 現状維持の選好をあまり持たないため非制度化において重要なアクターの一つ

3.2 非制度化と言説

言説 意味 (meaning) と現実社会への影響を生み出す、凝集された相互関係のあるテキストの集合

- 制度の再生産と強化を説明する 2 つのメカニズム
 - 主体の地位 *Subject position*. 官僚制的構造内における主体の地位。
限られた主体のみが言説を理解し、生産できる。
 - 知識の体系 *Bodies of knowledge*. 行動、発話、信念などに影響を与え、言説によって生み出される。
- RQ1 外部アクターによる非制度化における言説の役割は何か
- 同じテキストでも解釈によって異なる言説が生み出されることも可能
- RQ2 外部アクターによる非制度化における解釈の役割は何か

4 事例と方法

- DDT の非制度化
- 1874 年初めて合成、1939 年度に昆虫に対する毒性を発見
- 戦後、殺虫剤として拡散
- 後ほど有害性が疑問視され、1962 年、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』¹により問題化され広く共有されるように

¹ レイチェル・カーソン. 青樹 築一訳. 1974. 『沈黙の春』新潮社

4.1 リサーチデザイン

- DDT の事例：観察における透明性の確保が容易
- 『沈黙の春』、政府報告書、学術論文、インタビュー資料など (詳細は後述)

4.2 分析の流れ

1. 年代別データベースの作成

- DDT の非制度化に関する出来事を年代順にデータベース化
- 誰が何をしたか (言ったか)

2. 『沈黙の春』の分析

- 本の対象は不特定多数の人々
- 章単位で分析
- 安全 (safe)、効率 (effective)、必要性 (necessary) の面からの問題化に注目
- 科学的な証拠と DDT 使用の倫理的な面における言説→非制度化を唱える
- DDT 使用を擁護する認知的、規範的、規制的柱を弱化

3. 言説の変化の分析 (横断面)

規制的柱 連邦議会立法の分析 (1962, 1972 年)

認知的柱 昆虫学 (擁護派) と環境学 (反対派) の教科書分析 (『沈黙の春』の出版を前後にした同じ教科書の異なる版も用いる)

規範的柱 1962 年と 1972 年の *New York Times* における言説の変化

4. 言説の変化の分析 (時系列)

規制的柱 連邦規制と管理規定 (Administrative rulings) の文献^{テキスト}(1939~1972 年)

認知的柱 学術雑誌、博士論文 (*Proquest Dissertations and Theses* と *Reader's Guide to Periodical Literature* から "DDT" で検索)

規範的柱 1939 から 1972 年までの *New York Times* で "DDT" が言及された社説やコラムなど

5. 対抗するテキストの分析

- 最初に構築したデータベースから DDT 使用を擁護する言説を分析

5 分析結果

5.1 認知的柱

問題の一般化

安全性 『沈黙の春』の出版以前は安全性より害虫への効果が中心→出版→対抗言説の登場→問題化(争点化)→教科書にも波及→新規研究者における DDT に対する新たな言説の波及

効率性 出版前から効率性も面における疑問は認識されてきたが、環境学と昆虫学の言説は異なるものの、変化はなし

必要性 言及なし

新たな言説主体

- DDT 使用を擁護してきた農学・昆虫学→『沈黙の春』の出版→生物・環境・栄養学が新たな言説の主体として登場→新たな知識体系の形成

5.2 規範的柱

問題の一般化

- 言論社と NGO による問題の拡散
- 国の諮問機関による DDT 撤廃の勧告
安全性に重点; 効率性にはほぼ触れず; 必要性に関しては体内蓄積が少ない他の化学物質を奨励²

新たな言説主体

- 一般の大衆、NGO、(環境に関心のある) 政治家が新たな言説の主体として浮上

5.3 規制的柱

問題の一般化

- 規制は主に安全性を理由にされ、効率性は考慮されず
必要性に関してはカーソンの主張とは異なり、代替化学物質の使用を奨励

² レイチェル・カーソンは生物的調整を唱えた。

新たな言説主体

- 既存の規制機関の弱化
- 複数の政府機関からなる FCPC、最も重要なアクターとして EPA の登場

5.4 既存制度の柱の対抗

- NACA、モンサントなどが主な主体
- DDT の負の影響に関する科学的エビデンスの不足
- DDT の効率性の中心に対抗

6 外部アクターによる非制度化のモデル

- 命題 1. 外部アクターによる非制度化において、制度の退出は制度の 3 つの柱を弱化させる言説へ変更させる解釈過程の連鎖から生じる問題化によってもたらされる。
- 命題 2. 外部アクターによる非制度化において、既存の制度運営の阻止は既存の制度の (a) 負の影響、(b) 負の影響による反倫理的・不当さ、(c) 負の影響を弱らせる規制の変化を主張することで問題化しによって行われる。
- 命題 3. 外部アクターによる非制度化において、対抗言説は (a) 負の影響、(b) 反倫理・不当さ、(c) 規制の変化への反対理論を用いて対抗する。
- 命題 4. 外部アクターによる非制度化において、問題化の解釈プロセスは既存言説の構造と一貫性を弱化させていく。
- 命題 5. 外部アクターによる非制度化において、非制度化は新たな主体と知識体系の登場によってもたらされる。
- 命題 6. 外部アクターによる非制度化において、言説の変化は既存の制度的営みを支えてきた制度の柱を弱化させることによって非制度化を達成する。

7 結論

- 外部アクターによる非制度化において、言説の役割は何か。
新たな主体の言説→新たな知識体系の一般化
- DDT の例では主に安全性と必要性を中心に言説が展開
- 単に既存の制度を弱化させる論理だけでなく、代替案も必要

- 解釈の過程はアクターそれぞれであり、意図しなかった帰結も達しうる
例：DDT 言説における「効率性」(矮小化)と「必要性」(異なる方向)
- 限界
 1. $N = 1$ の事例研究による一般化の難しさ
 2. テキストの選択
 3. コーディングの問題

8 コメント

- 言説制度論の枠組みを用いた事例研究の手順を詳細に紹介したため、どのようにこの枠組を使うかに関するイメージをつかみやすくした点に意義があると思う。
- 分析の枠組みが文化人類学における構造主義 (レヴィ＝ストロースなど) にかなり似ていると思う。
- 著者は言説の解釈 (translation) の重要性について何回も強調してきたが、そのプロセスは未だブラックボックスのように見える。認知論や言語哲学なども取り入れない限り、難しいと思うが、そうなるあまりにも敷居の高い制度論になるのでは。
- 著者が指摘した本稿の限界は妥当であるが、テキストの選択やコーディングの問題はどうしようもない部分がある。しかし、単一事例ということはやはり命題を導き出すには弱すぎるのではないか。